

不登校児童への支援を図る教育相談

—個別的アプローチと人間関係を育てる援助を通して—

東風平町立東風平小学校教諭 比嘉恵子

内容要約

不登校の前兆や初期対応についての理解を深め、不登校の段階に合わせたアプローチを通した援助のあり方について研究した。また、児童相互、児童と教師の人間関係づくりをしていくための手立てとして、構成的グループエンカウンターの実践をした。その結果、児童同士がお互いに関心を持ち、児童と児童、児童と教師の新しい人間関係の広がりが見られた。

【キーワード】 不登校 人間関係 構成的グループエンカウンター

目 次

I テーマ設定の理由	31
II 研究仮設	31
III 研究の全体構想図	32
IV 研究内容	33
1 児童理解	33
(1) 集団に不適応を起こしている児童	33
(2) 不登校児童の理解	33
① 不登校の考え方	33
② 不登校児童へのアプローチ	34
③ 不登校児童の1事例	35
2 好ましい人間関係について	37
3 好ましい人間関係を育てる援助	37
V 授業実践	37
VI 研究のまとめと今後の課題	40

<小学校 教育相談>

不登校児童への支援を図る教育相談

—個別的アプローチと人間関係を育てる援助を通して—

東風平町立東風平小学校教諭 比嘉恵子

I テーマ設定の理由

地域や学校で、子どもたちが生き生きと活動していくことは父母や教師の願いである。本来、児童は家庭、学校、地域のよりよい人間関係の中で自己実現を図りながら健やかな成長をとげるものである。平成10年7月に出された教育課程審議会答申は、「学校は子どもたちにとって、のびのびと過ごせる楽しい場でなければならない。その基盤として、子どもたちの好ましい人間関係や子ども達と教師との信頼関係が確立し、学級の雰囲気も温かく、子ども達が安心して自分の力を発揮できるような場でなければならない。」と示している。

社会の急激な変化は子ども達を取り巻く環境にも大きな変化を与えた。少子化、核家族化、都市化が進み、家庭や地域の人間関係が希薄になってきた。子どもたち自身も塾や習い事等多忙になり集団で遊ぶ姿はほとんど見られなくなった。このような中で学校においては、学校生活に適応できない児童が増加し対応の難しい問題が多くなってきた。不登校、場面緘默症、カッとなりやすく自己統制力がないなどの問題をもち、好ましい人間関係を築くことが困難な児童が増えてきた。

これまでの学級経営において、日記や行動観察、コミュニケーション、父母からの情報などを通じて児童の理解に努めてきた。しかしながら、児童の内面理解、対応の難しさを痛感することがしばしばあった。学習面もよく、友達や学級でのトラブルも見られず、担任にもよく話しかけていた児童が登校拒否をおこし保健室登校になったことがあった。原因を探り何とか教室へ登校させたいと働きかけたけれど、児童の心を開くことができず、養護教諭と連携をとりながら待つことしかできなかった。3ヶ月あまりかかって教室に戻ることができたが、担任として児童理解の難しさを痛感させられ、適切な援助のあり方を考えさせられた。不登校になる前に児童が示した様々な行動を不登校の前兆としてとらえることができたら、違う対応ができるだろうと考える。

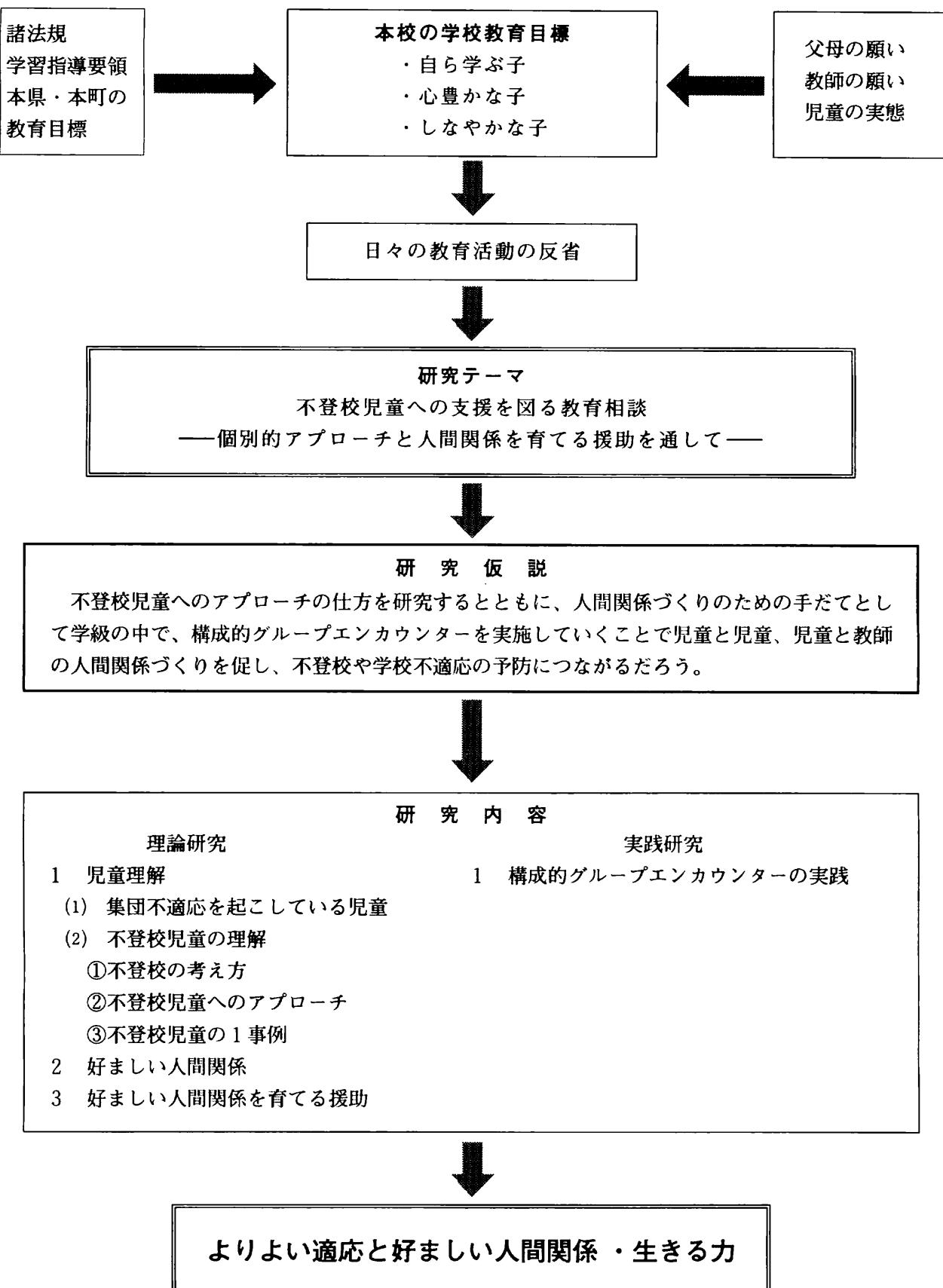
不登校には、様々な態様があり、すべてを把握することは困難である。しかし、不登校児童が増え続けている現在、学級や家庭で不登校の傾向を早期につかみ、適切な対応をしていくことができたら、不登校の予防につながるのではないだろうか。また、不適応を起こしている児童の多くが、人間関係がうまくつくれないために孤立感を感じたり、自己否定感を感じているといわれる。人間関係づくりの経験が不足しているために集団に適応できず、学校生活に不適応を起こしているとも考えられる。

そこで、不登校児童についての理解を深め、不登校児童への教育相談的アプローチを通した援助のあり方を研究するとともに、児童相互、教師と児童の人間関係づくりをしていくための手立ての一つとして、構成的グループエンカウンターを実施していくことで、不登校や学校不適応等への予防につながると考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

不登校児童へのアプローチのしかたを研究するとともに、人間関係づくりのための手立ての一つとして、学級の中で構成的グループエンカウンターを実施していくことで、児童と児童、児童と教師の人間関係づくりを促し不登校や、学校不適応の予防につながるだろう。

III 研究の全体構想図



IV 研究内容

1 児童理解

(1) 集団に不適応を起こしている児童

学級には、学校生活を送る上で様々な問題を抱えている子ども達がいる。不登校児童、いじめ、場面緘黙症児、多動児、孤立児、学習遅進児など学習や生活面で学校に適応できず、日々の学校生活を楽しく意欲的に活動できない児童が見られる。

児童にとって、学校が楽しく意欲的に活動できる場としていくために、担任はこのような児童の抱えている問題を把握し、その背景にあるものは何か理解に努め、学校生活によりよく適応できるよう支援していく必要がある。不登校は不適応がもっとも顕著に表れてきたものといえる。

(2) 不登校児童の理解

① 不登校の考え方

文部省は、不登校を「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童が登校しない、あるいはしたくともできない状況にあること（ただし、病気や経済的な由によるものをのぞく）をいう」と定義している。また、現在、不登校は誰にも起こりうるものととらえて、指導、援助をしていく必要があるとしている。不登校は、子どもが持っている諸要因（わがまま、耐性の乏しさ、強い自我、消極性、社会性に欠ける）が、親の養育態度にある諸要因（過保護、過干渉、過度の期待）や、教師としての子どもへの理解や指導の中にある諸要因（知る、わかる、教える、促進する、しかる、ほめる、励ます、注意する）が連鎖し、複合したときに登校を拒否するという行動や学校不適応となって表れてくると考えられる。

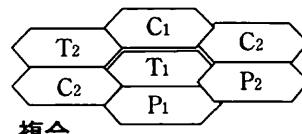
不登校には大きく分けて怠学傾向の不登校と神経症的登校拒否がある。怠学傾向の不登校は学校に行こうと思えば行けるのだが行こうとしない状態で、主として環境に問題があることが多い。非行につながることも多く家から平気で外に出ることができる。これに対して神経症的不登校は原因が周りにも本人にもはっきりしないことが多く、学校に行こうという意志はあるが行動がとれない状態である。不登校はある日突然起きるのではなく、多くの場合ある性格・行動の傾向を持った子供が何らかのきっかけで陥ってしまう問題である。すべての不登校についてその前兆をつかむことは困難であるが、学級担任の日常的な行動観察により早期発見が可能な場合もある。その時、不登校傾向の早期発見のポイントとして学校と家庭での子どもの行動についてまとめたのが下表である。

表1 学校・家庭における不登校早期発見の視点

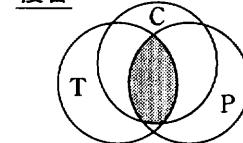
学 校	家 庭
①友人の中にはいるのが苦手	①登校時間にぐずぐずしてなかなか起きない。
②おとなしい	②朝になると頭痛や腹痛を訴えるが、登校時間を過ぎるとそのようなことはない。
③休み時間などに教室でひっそりしている	③登校時間前になると、いらいらして落ち着きをなくす。
④少しのことでも気にする。	④友人が迎えに来ると会いたがらなかったり、隠れてしまったりする。
⑤生真面目できちんとしている。	⑤放課後や休日は元気
⑥気が小さい。	⑥夜になると、翌日は登校する気分を見せる
⑦自信のないことには手を出さない。	⑦欠席していても学習のことは気にする
⑧規制や決まりにとらわれる。	⑧外ではおとなしいが、家庭ではわがままである
⑨いつも宿題をきちんとやっていくこうとする	

(國分康孝編集 学級担任のための育てるカウンセリング全書)

連鎖



複合



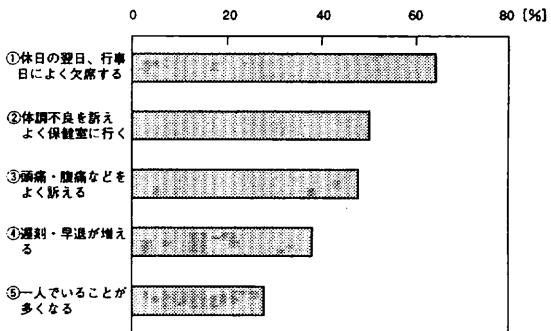
c : 児童の諸要因

p : 親の諸要因

t : 教師の諸要因

図1 不登校の発生

このような特徴を持った子ども達が不登校傾向を示し始めたとき、学校では右図のような様子を見せる。不登校を早期発見するためには、普段から気をつけて表1の子ども達に注意を向けておくこと、問題が始める初期症状を知っておくことがキーポイントである。日常的に行われる健康観察や出欠の調査で、原因不明の欠席が続いた場合は不登校の初期と考え、対応のための準備を考える必要がある。



② 不登校児童へのアプローチ

ア 初期対応

不登校の原因は複合的で特定の原因を突き止めることは難しい。原因探しに時間を費やしているうちに不登校を長期化することにもなりかねない。初期の段階で大切なことは家庭とのコミュニケーションをこまめにとることである。それが子どもの状態を正しく把握し、保護者の不安を和らげることにつながる。我が子が不登校らしいと考えたとき保護者は自分の子育てに自信をなくし、自分を責めたり、学校に原因を求め批判的な態度をとったり不安定になる。そのようなときこまめに連絡を取って、今後どのような対応をとるべきか話し合うことは教師との信頼関係を高め、その後の対応を考えていく上で大切なことである。できるだけ最初の数日のうちに保護者と連絡を取り、在宅時の様子や欠席に対する保護者の考え方などについて話し合っておく方がよい。不登校の原因が分かれればそれを取り除く努力をしていく。また学級の児童は不登校を怠けととらえがちなので不登校児の心身の状態について理解できるように話しておく必要がある。不登校の子が学級に戻ったときのため、また新たな不登校児を出さないためにも、どの子も安心できる温かい学級の雰囲気作りをしていくことが求められる。

イ 中期対応（ひきこもりの時期）

子どもが「ひきこもり」状態になるのは、ひきこもらずにはいられない心理に陥っているからであり、それまでに様々な心の葛藤を経ている。自分を傷つけると思っている対象に立ち向かうエネルギーを蓄える大切な時間であり、それぞれの子どもにとって必要な期間の「ひきこもり」を経て社会生活へと戻ってくることが可能になる。教師は、「ひきこもり」が本人にとって必要な時間であるとの認識に立って、子供が今どのような生活をしているかを把握し、保護者と連絡を取りながら、その状態に応じた対応をしていくことが大切である。親も不安な状態にあることが多いので、保護者を支えていくことも必要である。

「ひきこもり」が長引くにつれ、本人とクラスの子どもたちとの関わりが薄れていくことが多い。周囲の子どもたちが、「ひきこもり」にある級友のことを忘れないように日頃から働きかけることが必要である。担任からの連絡だけでなく、学級の子どもたちからの声も届け、気にかけていることを知らせるようにする。学年や生徒指導の集まりなどで、状況を説明しておくことも必要である。相談室や保健室登校の児童に対しても学級の動き・級友の声を届けるようにした方がよい。

ウ 回復期の対応（再登校の進め方）

不登校の問題で、再登校をめざすのは当然のことであるが、子どもの心身の条件を整え、気持ちの準備をさせることが大切である。再登校の働きかけをいつ始めたらよいか子どもの状態を見ながら進めていくことが大切である。まず、学校のことを話題にしても不快感や緊張をしめさないようになっている必要がある。また、担任や気の合う友達と学校以外の場ではふつうに会うことができるようになっている方が望ましい。そして、本人のストレスへの対処能力を高めておく必要がある。

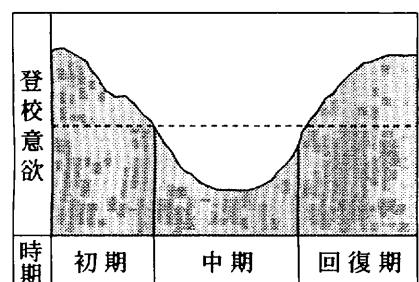


図3 登校意欲の変化

工 登校刺激の与え方

【初期】・・登校をしぶりだした段階で、親や教師が励ましたり友達に迎えにきてもらったりすることで登校できるようになることが多い。最初から効果があるかないか決めるのではなく、1度で判断するのではなく、子どもがどう受け止めたのか様子を見ながら指導・援助を進めた方がよい。

【中期】・・家庭における子どもの様子を保護者に観察してもらい、登校刺激を与えた方がよいかどうか判断してもらう。この時期子どもによってはいっさいの登校刺激を控えた方がよい場合もある。保護者との連絡は定期的に取り、回復期に向かっていることがわかれれば、登校刺激を直接教師から与えたり保護者から与えたりしていく。

【回復期】・・本人のエネルギーが回復てきて生活のリズムが戻り、自分から教科書を開くようになったら学校のことや友達のことを少し話題にしたりしてみる。強引に引き出すようなやり方は控える。行事や学年の節目も登校しやすいので働きかけを少し積極的にしていく。相談室や保健室に登校している子に対しても教室登校に向けた刺激を与える工夫が必要である。

③ 不登校児童の1事例

登校拒否を起こしたAさん

約3ヶ月の保健室登校から教室に戻ることができたAさんの事例を振り返り、支援のあり方、担任の役割について考えてみたい。

ア 事例の概要と経過

Aさん 6年 女児

父母、姉、本人の4人家族

学習面、生活面とも問題なくクラスに友人もいる

部活動も参加、読書や絵を描くのが好き

9月の始め

Aさんの様子と担任の支援

1学期とうって変わって元気がなく、気分不良でたびたび保健室に行く。疲れだろうから睡眠や食事をきちんととて生活リズムを整えよう、と話しているうちに朝食がとれなくなる。おにぎりを持参し、途中で保健室に行くようになる。ほとんど毎日気分不良や頭痛などを訴え保健室に行くようになる。母親に連絡を取ると、夏休みに母親が忙しくて家のことをAさんまかせにしていたので疲れがでたのかもしれない、とよく休ませるように気をつけるということになった。しかし、元気のない状態が続いた。食欲がなく、夜も眠れないと担任と養護教諭に訴える。養護教諭と話し合い、本人が保健室に行きたいというときはいつでも保健室で休ませるようにした。学級の児童から、「保健室にばかり行く」という声があり、Aさんの状況について子ども達に、体が疲れているときのように心も疲れて休まなければならないときもあると話す。

10月

Aさんの様子と担任の支援

気分不良の状態が続き、教室にいても、頭痛や腹痛がしたり心が落ち着かない。後半から教室に来れず、保健室に登校するようになる。養護教諭と話し合い、心も体も非常に疲れている状態なので保健室で様子を見ることにする。毎朝、保健室により声をかけるが表情が硬く体も固い。親しい友人に頼んで休み時間等に保健室に行ってもらい教室の情報を届けることにする。養護教諭と母親との面接で、家族が忙しくて寂しい思いをしていたことがわかった。部活で指導する立場なのだがうまくいかない悩みを持っていた。

保健室での支援方針・・・心の疲れをいやすことができるよう援助する。

保健室での具体的な支援

- 1 まず休養をさせる。
- 2 起きている時間は本人の好きなことをさせる。指示はしない。
- 3 身体的所見の観察をする。

- 4 気をつかわないで、素直に話し合える雰囲気を作る。
- 5 本人が悩みや不安を訴えるときは、真剣に話を聞き、苦しみを受け止める。
- 6 担任や両親と連絡を取り合い、協力して問題解決に当たる。

Aさんの様子と担任の支援

修学旅行の前日グループのメンバーに誘ってもらって教室での話し合いに参加してもらった。話し合いに参加することで修学旅行への自信を持たせたかったので参加できることで修学旅行への見通しがもてた。修学旅行にはどうしても参加させたかった。しかし当日、出発時刻になんでも姿が見えず家に電話するが留守であった。校長と養護教諭が友人のYさんを連れて迎えに行った。母親と学校まできたが車から降りられなかったということで二人とも目を真っ赤にしていたという。3人で本人を説得し参加させる。パーキングエリアで合流できた。初めのうちは緊張し硬い表情であったがだんだん和らぎ、2日目には友人と話したり、少し笑顔も見られるようになった。

11月

保健室での支援方針・・・修学旅行の余韻のあるうちに学級に戻れるよう準備態勢を整える
保健室での具体的な支援

- 1 10月の支援策はそのままで、教室へ行く習慣をつける。
- 2 規則正しい生活を心がけ、保健室でも授業時間は自習をさせる。
- 3 学級でAさんの心身の状態について説明し、教室へ戻れるための協力を依頼する。
- 4 養護教諭との交換日記を通して、Aさんが自分自身を振り返るのに役立てる。

Aさんの様子と担任の支援

修学旅行に参加できたことを自信に教室に戻るように働きかける。1日に1～2時間ずつ教室に戻れるようになった。が表情はまだ硬い。友人に迎えに行ってもらいできるときは3～4時間ずつ教室にいられるようになってきた。子ども達は温かく受け入れてくれた。

12月

保健室での支援方針・・・生活行動は本人の判断に任せる。不安や悩みがあるときだけ支援する。
保健室での具体的な支援策

- 1 11月の支援1～2は継続
- 2 あと少しの勇気で、元の状態に戻れることを説明する。
- 3 自分の行動は、自分で責任を持って行うよう動機づける。

Aさんの様子と担任の支援

朝保健室に登校したAさんを、友人に迎えに行ってもらい1～6校時まで教室で過ごせるようになる。表情も1学期の頃に戻り友人とおしゃべりが見られるようになった。中旬からは教室に登校してきた。2学期ももう少しなので無理はしなくていいから、がんばろうと話す。教室では静かに読書をしていることが多い。友人が話しかけると自然に答えていた。普段と同じように接したが、メモ日記や様子を注意深く観察するよう心がけた。

3学期

冬休み明けで気になったが、普通に教室に登校するようになった。家庭でも十分に話す時間を持ち、気持ちが安定してきたことが感じられた。

イ 事例の考察

- ・不登校は現象的にはマイナスであるが、Aさんの不登校は成長の過程から見ると非常に貴重な経験だったのではないかと考える。不登校から立ち直ることができたのは養護教諭の適切な支援と家族の支えがあったからだと考える。
- ・保健室でAさんを受け止めて、学級と連絡を取り合いながら問題の解決を図ることができたことは、学級の子ども達との関係も途絶えず児童の状態がわかり、働きかけがしやすかった。
- ・保健室にAさんの居場所がなかったら、Aさんの問題はもっと長引き、解決も困難になったと考える。

- ・担任は、学級が子ども達の「心の居場所」として温かい雰囲気に満ちた場所になるように、子ども達の人間関係、教師と子どもの信頼関係づくりをしていくことが大切である。
- ・保健室登校については、学校全体での共通理解をしていくことが必要である。

ウ 養護教諭との連携の重要性

Aさんの事例を通して、学校における保健室の役割や学級との関わりについて振り返ってみた。子ども達にとって、保健室は単なるけがや病気の時に利用する場所以上のところである。今、保健室は心の疲れをいやす場、心の居場所としても重要な役割を持ち、学級担任にとっても、父母にとっても子どものことで相談のできる大切な場となっている。単なる甘やかしでなく、必要としている児童には安心していられる場、心をいやす場としての役割がある。そのためには養護教諭と連携をとり、全職員が保健室に登校している児童について共通理解する場を設け、担任、養護教諭、全職員で育していく姿勢が必要である。教師と養護教諭も好ましい人間関係にあることが大切である。

2 好ましい人間関係について

子どもはいろいろな人々と関わりながら学校生活をし、活動している。学級での子ども達を見ると、友達と仲良く遊び、友達関係がうまくいっている子は生き生きとしている。子どもにとって、もっとも身近で日常的な集団は学級であり、生活の場が学級である。学級集団における人間関係は子どもの学校生活に大きな影響を及ぼす。人間関係が好ましいものであれば楽しい学校生活となるが、反対に好ましくなければ学校嫌いになったり、不登校になるときもある。子ども達が、学校生活に適応するためには好ましい人間関係が成立していかなければならない。

好ましい人間関係とは、教師と子どもの関係では敬愛と信頼があげられる。子どもの側からは、教師に対する尊敬、親近愛着感をもつことが必要である。そのためには、教師が一人一人の子どもを愛し、尊重することであり、すべての子どもに対して公正・公平であることが大切である。また、子どもと子どもの関係では、互いに認め合い、励まし合い成長しあう関係である。学級の中では、子ども達が自分自身を安心して出すことができる温かい人間関係である。

3 好ましい人間関係を育てる援助

学級の中で児童が好ましい人間関係を育てるためには、それぞれの発達段階に見合った人間関係づくりの体験が必要である。学校生活の中で、限られた時間の中でできる手だての一つとして構成的グループエンカウンターがある。構成的グループエンカウンターは、リーダー（教師）が事前に準備した演習（エクササイズ）を行うことで、その体験を通して自己や他者への理解を深め、ふれ合いのある人間関係づくりや維持の仕方を学ぶことができる。どのエクササイズにもねらいがあり、エクササイズの実施後にふりかえり（シェアリング）がある。シェアリングの中で自分の感情や友達の感情に気づき、その共通点や違いを肯定的にとらえることで、自己理解や他者理解を深め受容的な集団づくりを促す。指導の目的によっていろいろな編成ができる。（1回、短期集中型、年間を通して等）

V 授業実践

1 対象児

小学校3年生の1学級、児童数33人（男子14人 女子19人）
気になる児童（抽出児） 3人（男子1人、女子2人）

2 実態について

(1) 3年生になって2ヶ月余が過ぎた。係り活動、当番活動などは進んでやる子が多い。ボール遊びや野球の好きな子が多く、ゲームが好きと答えた子は1人だけで、外遊びの好きな子が多いPOEM（児童理解カード）の結果から見ると学級全体としては学級に適応している子が全国平均並である。しかし、自分の意志表示がうまくできず、ちょっとしたことで自分の殻に閉じこもってしまう子、自分の思い通りにならないと感情的になる子、又言語に少し障害がありみんなから少し距離を置かれている感じの子など気になる子が何人かいる。学級集団としてはお互いにまだ知らない子も多く、低学年からの友達関係はあるが、自分から話せない子などは孤立してしまいかがちである。

(2) 気になる児童（抽出児）

児童理解カードと日常の観察の結果から不適応型の児童（男子Tくん、女子Hさん）、言語に少し障害がありみんなから距離を置かれている児童（女子）を抽出児として選んだ。抽出児の問題および課題は次のようにになっている。

表2 抽出児の問題及び課題と援助の手立て

	Tくん	Hさん	Sさん
問題 および 課題	<ul style="list-style-type: none"> ・自分勝手で、わがままな行動をしても自分を正当化して切り抜けようとする。 ・自分の言動や行動をコントロールすることができるようになる。心理検査の結果は5つのタイプで不適応型。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意思表示ができず、ちょっとしたことで自分の殻に閉じこもってしまう。 ・話しかけられたり、誘われたりしたときは、答えていけるようになる。心理検査の結果は対人積極性、攻撃性（物事への意欲）が不適応型。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発音の不明瞭なところがあり、級友から少し距離を置かれているようなところがある。 ・発音については専門の機関で見てもらうとともに、訓練が必要であればやっていく。話せる友達を増やしていくこと。心理検査では対人積極性が不適応型。
援助の手立て	行動の結果だけを見るのではなく、行動の過程での努力を評価してあげる。相手の立場を認め協調的に行動できた場面を見いだすようにし、機会を逃さずほめてあげる。	先生や友だちに受け入れられているという気持ちがもてるよういろいろな場面で声をかけてあげる。話のできる子と同じグループにし、輪の中に入っていけるようにする。	友達と会話ができるように教師も加わって援助していく。とても温かい気持ちを持っているのでそれをわかってもらえるような場面をつくり、友達との関わりを持てるようにしていく。

3 内容および方法

表3 構成的グループエンカウンターの指導計画（短期集中型で5回行った。）

月 日	題 材 名	目 的
5月16日	・ネームゲーム	・学級内のリレーションづくり級友の名前や特徴を覚え、友達に対して肯定的な感情を持ち、温かい人間関係を作る。
6月13日	・質問ジャンケン	・相手に関心を持って質問することで級友を知り、お互いを肯定的に認め合う。
6月21日	・ご指名です ・聖徳太子ゲーム	・学級内のリレーションづくり。協力して番号をコールすることで協調性を高め人間関係づくりをする。 ・1人の力では難しいことを、グループの力で成し遂げる体験を通して、リレーションづくりをする。
6月27日 本時	・私のイメージ 「これが ぼくです わたしです」	・自分をじっくりと振り返り、自分の良さや特徴に気づく。友達からの発見と合わせて新しい自分のイメージを膨らませる。
7月3日	・ほめあげ大会	・友達のことを肯定的に見ていくことで、思いやりの心を育てる。クラスのみんながお互いを認め合う体験を通して、自己肯定感を育てる。

4 題材名 私のイメージ「これが ぼくです わたしです」

5 ねらい

HさんTくんを含め、学級の子供たちが、いろいろな言葉で自分のことを表現し自分のイメージを膨らませ、自分の良さや特徴に気付き自己肯定感を持つことができる。また友だちと紹介し合うことができる。

6 (授業の仮説)

・自分のことを振り返ったり、友達からの発見で自分の良さや特徴に気づき、友達と紹介しあ

う体験を通して自己理解や他者理解を深めることができるであろう。

- ・HさんTくんに個別的に援助することによって学級の友達と関わっていこうとする意欲を持つことが出来るであろう。

7 準備

ワークシート 筆記用具

8 展開

課程	児童の活動	教師の支援
エクササイズ インストラクション 10分	<ul style="list-style-type: none">・エクササイズの説明をする・自分について考える<ul style="list-style-type: none">*自分ってぼくのこと私のこと*絶対に他の人ではない自分のこと・自分について誰かに説明するしたらどんな言葉で言うか考える<ul style="list-style-type: none">*ひょうきん、いたずら、おしゃべり、〇〇が好き、嫌い、得意、苦手、学校を休まない、友達に親切など・でた言葉を使って「ぼくは〇〇です」と「私は〇〇です」と説明してみる。・自分はどんな子か似顔絵の周りに書き込んでみる。・書けた人は理由も考える<ul style="list-style-type: none">*ぼくはおしゃべりです。わけは、友達に云いたいことがたくさんあるからです	<p>はっきりわかりやすく伝える</p> <ul style="list-style-type: none">・ブレーンストーミング形式でたくさん出させる・否定的な表現は教師が適切な言葉に置き換える
エクササイズ 15分	<ul style="list-style-type: none">・2人組を作つて自分のイメージやそれを選んだ理由も教え合う。3人組でも良い。*ワークシートを見せながら自分ことを説明する。・友だちからの発見をワークシートに書き込む。	<ul style="list-style-type: none">・ブレーンストーミングで出されたことは以外に自分で考えても良い。Tくん、Hさん、Kさんへの援助をする。・たくさん書きたい児童には空きスペースに書き込むように指示する。・2人組で行つことで自己開示しやすい雰囲気を作る。・ワークシートを見せながら自分を説明する。・友だちからの「発見カード」を配る
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none">・自分のことについて話しての感想、友達からの発見を呼んでの感想を聞く。・自分のことを振り返つていろいろな言葉で説明	<ul style="list-style-type: none">・発表できないときは、質問をして聞いたり、ワークシートを読ませたりする

9 授業実践の考察

(1) エクササイズに対する考察

- ・5回のエクササイズを終えて、子どもたちからもっとやりたいという声が多くあった。新しい友だちとの触れ合いや、友だちに良さを書いてもらってうれしかったという感想から、自己理解や、他者理解が促されたと考える。
- ・エクササイズのねらいをよく理解させることや、楽しいだけで終らせずにシェアリングの力をつけて、ねらいを達成できるような工夫が必要である。

(2) 抽出児の変容と課題

(Tくん) 不適応型から適応型へと変わっている。セルフコントロール、向社会性で適応に変わっているのは、自分の欲求をコントロールができるようになってきたことを示す。対人関係についても他人の心情を理解できるようになってきたことを表している。しかし、まだ、周りの人に受け入れられているという意識が弱いので、その面での援助が必要である。(資料1)

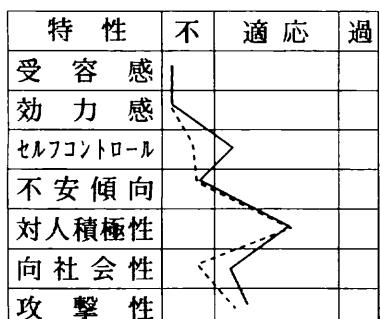
(Hさん) 対人積極性で不適応を示していたが、適応に変わっている。考えを相手に伝えようとする積極性が出てきているので、意識的にそういう場を作っていくとともに、周りの人に受け入れられてないという気持地があるので、いろいろな場で言葉かけをしていくようになる。(資料2)

(Sさん) 適応型から不適応型へと変わっている。不安傾向、効力感が不適応になっている。発音がはっきりしないことが、自分の考えがうまく相手に伝わらないという不安要因になっていると思われる。人との関わりを意図して持たせるエクササイズでは話す活動が多くなるのでSさんにとっては負担になったのではないか。親、先生、クラスの友達など大切な人からは、受け入れられているという受容感を持っているので、友達の中でSさんのよいところに気づき認めてもらう場面を作り、自信を持たせていくことが必要である。(資料3)

資料POEM(児童理解カード)の結果より

不(不適応型) 適応(適応型) 過(過剰適応)

-----授業前——授業後



資料1 Tくん



資料2 Hさん



資料3 Sさん

VI 研究のまとめと今後の課題

1まとめ

- 構成的グループエンカウンターを実施することで、初めての友達に質問したり、自分と同じ趣味を持っている人を見つけたり、学級の児童同士の人間関係の広がりが見られ、教師との関係も築くことができた。
- 教師の行動観察や児童の内面理解のための心理検査(POEM)の結果とあわせて児童理解を図ることで、一人一人の課題を持ってアプローチをすることができ、抽出児の変容が見られた。
- 不登校児の支援のあり方について、資料や文献により理解を深めることができ、これまでの事例を考察し直すことができた。

2 今後の課題

- 好ましい人間関係を作っていくための育てるカウンセリングについての理解を深め、学校において特別活動や道徳等で活かしていく取り組みを考えたい。
- 不登校や学校不適応についての理解を深め、対応の仕方について継続して研究していきたい。

<主な参考文献>

全国教育研究所連盟編	『登校拒否児の理解と指導』	東洋館出版社	1988年
全協連叢書	『学級担任による教育相談の展開』	東洋館出版社	1988年
國分康孝	『学級担任のための育てるカウンセリング』	図書文化	1998年
國分康孝	『エンカウンターで学級が変わる』	図書文化	1996年
文部省	『小学校における教育相談の進め方』	大蔵省印刷局	1991年